フィンランド語の使役構文について*
–被使役者をあらわす接格名詞句の分析を中心に–

千葉 庄寿 (博士課程)

1998 年 6 月 22 日 (月) 言語学演習

1 はじめに

フィンランド語には、形態論的に派生された動詞 (使役動詞) を用いる使役表現がある。

フィンランド語の使役構文に現れる使役動詞は、派生元の動詞に *-ttA-* (*-tta-*/*-ttä-*[1]) ないし *-UttA-* (*-utta-*/*-yttä*) という接尾辞をつけて派生される。使役動詞の派生のプロセスは非常に規則的で、派生元の動詞と使役動詞は、意味的にも形態的にも、容易に関係づけることができる。

-ttA- と *-UttA-* の 2 種の接尾辞異形態の違いは接尾辞のつく語幹の形態論的な特性に基づくもので、接尾辞の違いによる意味的な差異はなく、また、動詞の活用のタイプにより、上記の 2 種の語尾のうちのどちらがつくかがはっきり決まっている (Kytömäki 1989:61)。以下に、動詞のペアの例を挙げる[2]。動詞につく使役の派生形態素を CAUS のグロスで示している:

(1) a. *marssi-a* VS. *marssi-***tta**-*a*
行進する-1INF 行進する-CAUS-1INF
「行進する」(自動詞) 「行進させる」(使役動詞)

b. *kävel-lä* VS. *kävel-***yttä**-*ä*
歩く-1INF 歩く-CAUS-1INF
「歩く」(自動詞) 「歩かせる」(使役動詞)

---

*草稿の段階で、松村ゼミのゼミ生をはじめ、多くの方から助言を頂いた。特に松村一登先生には、多くの貴重なアドヴァイスを頂くとともに、用例資料をご提供頂いた。記して感謝致します。

[1] フィンランド語には母音の前舌・後舌による母音調和があり、派生辞の母音の質は語幹のそれに従う。

[2] グロスでは形態素をハイフン - で、また複合語の成分を等号 = で区切った。またマーカーの顕在しない語形のもつ情報や、複数の文法情報を表すマーカー (いわゆる鞄型形態素) のグロスは、ピリオド . に続けて表記している。その他、例文に用いた略号は次の通りである:

&=列挙の小辞; 1,2,3=人称; 1INF=第 1 不定詞; 2INF=第 2 不定詞; 3INF=第 2 不定詞; ABL=奪格; ADE=接格; AKK=対格; ALL=向格; be=コピュラ動詞; CAUS=使役の派生接尾辞; COMP=比較級; ELA=出格; ESS=様格; GEN=属格; ILL=入格; IMP=未完了過去; INE=内格; KOND=条件法; MAPT=動作主分詞; NEG=否定の小辞; NOM=主格; PAR=分格; PASS=受動; PAST=過去; PRPT=現在分詞; PL=複数; PSPT=過去分詞; PX=所有接尾辞 (+人称, 数); Q=疑問の小辞; REL=関係代名詞; SG=単数; SK87=フィンランドの週刊誌 *Suomen Kuvalehti* の 1987 年の記事を集めたコーパス; SUP=最上級; TRA=変格; VNEG=否定動詞

c. *paina-a* vs. *paina-***tta**-*a*
刷る-1INF 刷る-CAUS-1INF
「刷る」(他動詞) 「刷らせる」(使役動詞)

d. *rakenta-a* vs. *rakenn-***utta**-*a*
建てる-1INF 建てる-CAUS-1INF
「建てる」(他動詞) 「建てさせる」(使役動詞)

使役動詞を用いる使役表現を、本発表では使役構文と呼ぶ。フィンランド語の使役構文では、被使役者のとる文法関係が、使役動詞の派生元の動詞の自他によって異なる。以下にあげる例文のペアのうち、b. が使役構文、a. は使役構文に意味的に対応する非使役文である:

(2) a. *Koko* *seura* *nauro-i.*
全 仲間.NOM 笑う-IMP.3SG
行為者 = 主語
「みんなは笑った」

b. *Hän* *naura-***tt**-*i* **koko** **seura-n**.
彼.NOM 笑う-CAUS-IMP.3SG 全 仲間-AKK
使役者 = 主語 使役動詞 被使役者 = 直接目的語
「彼はみんなを笑わせた」(Volodin *et.al.* 1969:228; cited in Comrie 1975:21)

(3) a. *Muurari-t* *rakenta-vat* *talo-n.*
大工-NOM.PL 建てる-3PL 家-AKK
「大工が家を建てる」

b. *Minä* *rakenn-***uta**-*n* *talo-n* **muurare-i-lla**.
私.NOM 建てる-CAUS-1SG 家-AKK 大工-PL-ADE
使役者 = 主語 使役動詞 被使役者 = 接格
「私は大工に家を建てさせる」(Volodin *et.al.* 1969:231; cited in Comrie 1975:21–22)

対応する非使役文が自動詞文の場合、被使役者を表す名詞句は使役動詞の直接目的語としてあらわれる。この場合、被使役者をあらわす目的語は、動詞の必須の項であり、通常削除できない。

一方、対応する非使役文が他動詞文の場合、被使役者は斜格の一つである接格 (接尾辞 *-llA*(*-lla*/*-llä*)) をとってあらわれる。この場合、対応する非使役文が自動詞文の場合と異なり、被使役者をあらわす接格名詞句は、次の例にみるように、表層構造にあらわれなくてもよい。

(3) c. *Minä* *rakenn-uta-n* *talo-n* ∅.
私.NOM 建てる-CAUS-1SG 家-AKK (被使役者なし)
「私は家を建てさせる」(cf. 例文 (3b))

(3c) は、(3b) から接格名詞句を除いたものであるが、接格なしでも文法的である。また、(3c) は、「私」が自分で家を建てた、という意味には決してならない。つまり、被使役者をあらわす接格名詞句の出没では使役構文のもつ使役の意味は失われない。つまり、対応する非使役文が他動詞文の使役構文の場合、被使役者が表層に現れているか否かに関わらず、被使役者の存在は常に含意される (cf. Kytömäki 1978:142)。

本発表では、上記の (3b,c) のような、他動詞文から派生した使役構文[3] をとりあげ、この構文に現れる、被使役者を表す接格名詞句のふるまいを分析する。

他動詞派生の使役構文に関するこれまでの分析では、接格名詞句があらわれる (3b) のような構文構造を基本とし、接格名詞句が現れない構造は、この基本構造から接格名詞句が削除されてできたもの、と考える見方が一般的である (Hakulinen & Karlsson 1979:243–4; Pylkkänen 1997)。

本発表では、コーパスに現れた使役構文の用例分析を通じ、実際には被使役者をあらわす接格名詞句は表層にあらわれない方が圧倒的に多く、被使役者が出る例はむしろ稀であることを示し、先行研究の主張とは逆に、被使役者をあらわす接格名詞句が現れない構造が、構文としてより基本的であることを論じる (§3)。

被使役者をあらわす接格名詞句があらわれている用例の文脈を詳しく調査し、むしろ特別な必要がある場合に接格で被使役者があらわれることを確かめ (§4)、他動詞派生の使役構文が、被使役者を述べない、という構文的な機能をもっていることを主張する (§5)。

2 先行研究

この章では、フィンランド語の被使役者をあらわす接格名詞句のふるまいを先行研究の立場がどのように説明するかに注目しつつ、使役構文に関する先行研究において分析の前提となっている使役構文の構文特徴をまとめる。

先行研究では、一般言語学、フィンランド語学の立場を問わず、少なくとも 2 つの構文特徴が認められている。一つは、構文の意味的特徴で、使役構文では二つの異なる出来事が複合的に表わされる、ということ、もう一つは、統語的に、使役構文には、使役者という意味役割を持った項が主語として新たに加わることである。先行研究の想定する使役構文の統語的派生プロセスの代表例として、Comrie (1975) の分析を紹介する。

2.1 2 つの異なる出来事の関与

第一に、使役構文では、「使役」と「実際の行為」という 2 つの異なる出来事が一つの構文内で複合的に表現されるということである (Comrie 1975:2; Kytömäki 1978:141; Hakulinen & Karlsson 1979:243–244; cf. Palmer 1994:217–218)。(3b) を例にとると、「私」が大工に家を建てることを命じることと、大工が家を建てる、という行為は、別の出来事であり、命令と実際の行為は、前者が後者に先行しているかぎり、時間的、空間的に隔たっていてもかまわない。

フィンランド語学においても、同様の主張がみられる。Kytömäki (1978:139–141) は、フィンランド語の使役構文の主要な認定基準として、

- 使役者と被使役者という 2 つの項が関わるか否か
- 被使役者が動作をコントロールできるか否か

[3] 以下では、「他動詞文から派生した」使役構文という表現を、「意味的に対応する非使役文が他動詞文である」使役構文、の意味で用いている (“noncausative equivalent” Comrie 1975:2–3; “nichtkausative Korrelate der entsprechenden kausativen Konstruktionen” Nedjalkov *et.al.* 1973:274)。「派生」は便宜的な概念に過ぎず、2 つの文の間に何らかの統語的な派生関係を想定する立場をとるわけではない。

の 2 つを挙げているが、この指摘も、使役と実際の行為という 2 つの出来事を区別する立場をあらわしているといえる。

使役構文を 2 つの出来事の複合とみる考えは、確かに、フィンランド語の他動詞派生の使役構文で、被使役者が表層にあらわれなくとも、被使役者の存在が常に含意されることを、意味的には説明するように思われる。使役はその基本構造として、2 つの異なる出来事を潜在的に含むからである。

Comrie (1975) は、さらに、使役構文とそれに意味的に対応する非使役文が、何らかの派生関係をもつ、と考え、使役構文の基本構造 (1b, 2b) のなかには、対応する使役を含まない文 (1a, 2a) が埋め込まれている、と仮定する (1975:2)。この考えを図示すると、以下のようになる。

(4)　[使役者 使役 [被使役者 動作]]

迂言的使役、形態論的使役、といった使役要素のあらわれ方の別を問わず、Comrie は、この構造を使役構文の基本構造とみる。その結果、使役構文は、この構造から何らかの統語的な操作を経て派生されることになる。同様の主張はフィンランド語研究者のなかにもみられる (e.g. Hakulinen & Karlsson (1979:243–244))。

2.2　使役者の介入と被使役者の降格

もう一つ、使役構文の特徴として重要なのは、使役を含まない文と使役構文とを比較すると、使役構文では、動詞の要求する項に使役者という新たな項が主語として加わることである。Comrie (1975) は、この点に注目し、派生元の動詞の行為者がとる文法関係と、使役構文において被使役者がとる文法関係との対応を、動作主 (被使役者) の主語からの降格、という概念で説明する (1975:5–8)。

Comrie によれば、使役者という新しい項が加わることにより、被使役者は「格階層」(“Case Hierarchy”, Comrie 1975:27, fn*) と呼ばれる以下のような文法関係の階層の頂点にある主語の位置を追われ、階層中の、より下の層に降格する:

(5)　主語 > 直接目的語 (> 間接目的語) > 斜格名詞句

では、被使役者が使役構文内でどの文法役割をとるのかは、具体的にどう決定されるのであろうか。被使役者の降格のメカニズムとして Comrie が主張するのは、“Paradigm Case” と呼ばれるものである。Comrie によれば、言語が使役構文をもつ場合、使役構文の被使役者を表す項は、各階層の中で、動詞のとる項としてすでに埋められていない、最も高い位置にある文法関係をとってあらわれる傾向がある (Comrie *idem.* p.4;8–9)。

Paradigm Case の概念は、フィンランド語の使役構文で、派生元の動詞の自他の違いにより被使役者のとりうる文法関係が異なることをうまく説明する。フィンランド語で、派生元の動詞が自動詞のとき、被使役者は主語の位置から降格し、まだ埋まっていない最も高い文法関係である目的語として現れる (例文 2b)。一方、派生元の動詞が他動詞の場合、被使役者はすでに埋まっている目的語の位置をとることができず、さらに降格して、斜格である接格をとって現れるのである[4] (例文 3b)。

[4]フィンランド語では、間接目的語を独立した文法関係として設定する強い根拠はない。

しかし、一方で、この分析は、フィンランド語の使役構文で、他動詞派生の使役動詞の被使役者項がしばしば表層に現れないこと、また、なぜ被使役者項が現れにくいかをうまく説明しない。Comrie の降格のプロセスに則るならば、被使役者は、主語位置から接格へと降格し、その後表層から消える、と解釈しなければならない。しかし、次章でみるように、フィンランド語の他動詞派生の使役構文の場合、実際には接格の被使役者を含まない例が大多数であり、このような説明では決して十分ではない。

先行研究で、被使役者項が現れない構造について言及しているものは少ない。Palmer (1994:221) は、イタリア語の例をあげ、被使役者の省略可能性が Comrie の Paradigm Case にとって問題となることを述べている。Wunderlich (1993:740–741) は、フィンランド語を含め、幾つかの言語が被使役者を「削除」できることを述べているが、被使役者がない例の方がより一般的なフィンランド語のような事例を、積極的に扱ってはいない。

3 データと分析

3.1 調査の方法とデータの概略

本発表の基礎資料は、フィンランドの保守的週刊誌 *Suomen Kuvalehti* の 1987 年度の記事を集めた電子コーパス (以下 sk87 とする) である。コーパスはヘルシンキ大学一般言語学科の Unix サーバーに収められており、収録されている単語数はおよそ 120 万語、ピリオドを単位として数えるとおよそ 11 万強の文からなる。

コーパスからの用例の採取に際し、Kytömäki (1978) の使役動詞のリスト[5]を用いた。リストに収録されている使役動詞のべ数は 366 である。このうち、接辞の重複[6]を除いた異なり語数は 335 であり、その内訳は、以下のようである:

表 1 : Kytömäki (1978) の使役動詞のリストの内訳

派生元動詞	他動詞	自動詞	他自どちらでも	合計
語数	291	27	17	335
(%)	(86.9%)	(8.1%)	(5.1%)	(100.1%)

調査では、このリストに挙げられた動詞語幹について、その可能な活用形をコーパスから検索し、用例のデータベースを作った。用例検索の結果、sk87 コーパスからは他動詞、自動詞合わせて 150 あまりの用例が得られた。その内訳は以下のようである。

[5]このリストは、戦前に収集されたデータを用いて作成されたフィンランド語辞典 *Nykysuomen sanakirja* の見出し語から、使役動詞と解釈できるものをひろって作られたものである。

[6]使役の意味を強調するために、使役の派生辞が二重に付加されることがある:

> *etsi-ä*「探す」→ *etsi-ttä-ä* (探す-CAUS-1INF) ~ *etsi-ty-ttä-ä* (探す-CAUS-CAUS-1INF)「探させる」

接辞が二重についた場合でも、接辞が一つだけつく場合と実際の意味は殆んど変わらない (Kytömäki 1978: 147,149; cf. Pennanen (1986))。

表 2 : sk87 に現れた使役動詞の内訳

派生元動詞	他動詞	自動詞	その他	合計
のべ語数	123	24	6	152
(%)	(80.4%)	(15.7%)	(3.9%)	(100%)
ことなり語数	41	7	4	52
(%)	(78.8%)	(13.5%)	(7.7%)	(100%)

以下では、このうち、他動詞派生の使役構文の用例 (123 例) について、分析をおこなう。まず、本章の以下の節では使役動詞の動詞毎の出現頻度、被使役者項の現れる頻度を調査する。次章では被使役者項を含む用例について、幾つかの角度から予備的な検討を加え、被使役者項が現れる環境を描き出すことを試みる。

3.2 動詞毎の出現頻度

まず、個々の動詞の出現頻度をみると、動詞によって出現頻度にかなりの偏りがみられることがわかる。以下は、sk87 コーパスに現れた他動詞派生の使役動詞のリストである。

表 3 : 他動詞派生の使役動詞のリスト

使役動詞	「意味」	派生元の他動詞	f
arvuuttaa	「考えさせる」	arvata	1
astuttaa	「(~と) 交尾させる」	astua	1
haettaa	「取らせる」	hakea	1
hakkauttaa	「切らせる」	hakata	1
harjoituttaa	「練習させる」	harjoittaa	2
hinauttaa	「どかす」	hinata	1
hoidattaa	「世話させる」	hoitaa	2
hyväksyttää	「受け入れさせる」	hyväksyä	1
kaivattaa	「掘る」	kaivaa	1
kastattaa	「洗礼をうけさせる」	kastaa	1
kierrättää	「囲ませる」	kiertää	1
kirjauttaa	「受付させる」	kirjata	1
kirjoituttaa	「書かせる」	kirjoittaa	2
korjauttaa	「修理させる」	korjata	4
kruunauttaa	「載冠させる」	kruunata	1
kutsuttaa	「招待させる」	kutsua	2
〃	「(~という名で) 呼ばせる」	〃	1
kuvauttaa	「描かせる」	kuvata	1
kyydittää	「人を送らせる」	kyydittä ~ kyytiä	1
†laadituttaa	「作成させる」	laatia	1
luettaa	「読ませる」	lukea	2
†maksattaa	「払わせる」	maksaa	6
mittauttaa	「計らせる」	mitata	1
murhauttaa	「殺させる」	murhata	1
otattaa	「取らせる」	ottaa	3
painattaa	「刷らせる」	painaa	3
pesettää	「洗わせる」	pestä	2
pidätyttää	「捕まえさせる」	pidättää	2
puhuttaa	「話させる」	puhua	1
purettaa	「壊させる」	purra	1

rakennuttaa	「建てさせる」	rakentaa	17
selvityttää	「解明させる」	selvittää	1
tapattaa	「殺させる」	tappaa	2
tarkastuttaa	「調べさせる」	tarkastaa	2
†tarkistuttaa	「チェックさせる」	tarkistaa	1
†teettää	「作らせる、	tehdä	42
~ teetättää	(仕事等を) させる」		3
tuottaa	「持ってこさせる」	tuoda	1
vaihdattaa	「交換させる」	vaihtaa	1
vedättää	「引かせる」	vetää	2
	合計:		121

teettää ~ teetättää「作らせる、させる」(45 例 (37.2%)), *rakennuttaa*「建てさせる」(17 例, 14.0%), *maksattaa*「支払わせる」(6 例) など、使用頻度が最も高い 3 つの動詞だけで、全用例中の 56.2% を占める。特に *teettää ~ teetättää* の使用頻度の高さが傑出していることがわかる。

3.3 被使役者をあらわす接格名詞句の出現頻度

次に、被使役者をあらわす接格名詞句が、他動詞派生の使役構文の用例中どれほどの割合で現れるかを調べた。

接格の使役者が現れたのは、 123 例のうち、わずかに 10 例、比率にして 8.1% に過ぎなかった。接格の被使役者項は、前ページの表で、使役動詞の不定形の前にダガー (†) をつけた動詞に現れた。動詞毎の出現頻度をまとめると以下のようになる:

表 4: 被使役者が接格で現れる用例の分類

使役動詞 (全出現数)	「意味」	派生元の動詞	合計
laadituttaa (1)	「作成させる」	laatia	1
maksattaa (6)	「支払わせる」	maksaa	3 (50.0%)
tarkistuttaa (1)	「調査させる」	tarkistaa	1
teettää (42)	「(仕事等を) させる」	tehdä	5 (11.9%)
		合計	10 (全用例中 8.1%)

動詞毎の出現頻度で他から抜きん出ていた *teettää*「作らせる、させる」が被使役者を含む用例の半数を占めるが、出現頻度が比較的高く、全出現例中に占める被使役者を含む例の割合が多いのは、*maksattaa*「支払わせる」である。また、全部で 17 例ある動詞 *rakennuttaa*「建てさせる」に 1 つも被使役者項を含む例がないことにも、注意したい。(動詞の意味の詳しい考察は次節で行う。) (6) に、被使役者項を伴う例を挙げる。

(6) *Kilpailija-t* **o-vat** **laadi-tu-tta-neet** **juriste-i-lla** *lausunto-ja,*
選手-NOM.PL be-3PL 作る-CAUS-CAUS-PSPT.PL 審判-PL-ADE 要望書-PL.PAR
使役動詞 (現在完了形) 被使役者=接格
jo-i-den *mukaan* [...]
rel-PL-GEN よれば

「競争相手たちは弁護士に声明文を作らせた。それによれば...」(sk87-39:396)

3.4　主語、目的語の分布との比較

上で挙げた接格被使役者の出現頻度を、より客観的に評価する判断材料として、参考までに、使役者を表す主語、動作の対象を表す目的語が表層に現れる頻度を以下に示す。被使役者を表す接格の出現頻度と比べられたい[7]。

表 5 : 他動詞派生の使役構文における主語、目的語、被使役者の接格の出現頻度の比較

他動詞派生の使役構文: 計 123 例							
定形動詞として			計 86 例		非定形動詞として		計 37 例	
主語あり	69				母胎文の主語に同じ	11		
動詞屈折のみ	2	計 71	(82.6%)		主語あり	15	計 26	(70.3%)
目的語あり		85	(98.8%)		目的語あり		37	(100%)
接格被使役者あり		6	(7.0%)		接格使役者あり		4	(10.8%)

cf. 定形動詞で主語なし = 17 例 (内訳: 受動文 (動詞は受動形) = 12; 総称文 (動詞は 3 人称単数) = 4; 文体による省略 = 1)

この表から、例えば使役構文が定形動詞として使われている場合、使役動詞の使役者主語、および動作の対象を表す目的語が省略される比率に比して (定形動詞でそれぞれ 17.4%, 1.2%)、被使役者が現れない割合は 93.0% と圧倒的に高いことが容易にみてとれる。

3.5　まとめ: 使役構文における接格被使役者の位置づけ

他動詞派生の使役構文で、本来ならば出現が予測される接格被使役者が、実際の用例では殆んど現れない、というデータをみてきた。先行研究のように、接格名詞句がある構造を基本とし、被使役者が現れない構造は基本構造から接格名詞句が削除されてできたものである、とする考えは、これまで見てきた接格名詞句の分布を正確に反映したものとはいえない。

そこで、先行研究とは逆に、被使役者が現れない構造を使役構文の基本的な構造とみることができる。この場合、被使役者項は、必要な場合に限って後から挿入しうる要素と考えることができる。つまり、何らかの理由で必要なときのみ現れるであると解釈できる。

このように考えることで、フィンランド語の使役構文における接格被使役者の分布傾向を、より自然に捉えることができる。しかし、この立場をとる際には、被使役者の出現環境を述べる必要が出てくる。

4　検討: 被使役者項の出現環境

この章では、被使役者をあらわす接格名詞句が現れる用例を詳しく検討し、被使役者をあらわす接格が現れやすい環境、さらには接格を必ず要求する環境をさぐる。

今回扱うデータには、被使役者をあらわす接格名詞句を伴って現れた使役構文の例が 10 例しかなく、これらの用例だけに基づく一般化には慎重でなければならない。本発表の以

[7]ここでいう定形動詞は、節の主動詞として使役動詞が現れている例をまとめたもの (計 87 例) で、本来の定形動詞に加え、*voi-da*「できる」; *osa-ta*「できる」; *saatta-a*「かもしれない」; *pitä-ä*「ねばならない」等の助動詞とともに第 1 不定詞で現れた使役動詞、および分詞構文中の分詞として現れた使役動詞を含む。このグループに関しては、少なくとも構造による主語、目的語の出現制約はない。非定形は、残りの例をまとめたものである。

下の考察には、コーパスから得られたデータに加え、sk87 コーパス以外の典拠から集めた使役構文のデータも併用するが、この節で論じる内容は、より広範な資料による裏付け調査、さらにはインフォーマント調査による検討が必要だと思われる。

4.1 接格被使役者と共起する動詞の意味

ここでは、被使役者をあらわす接格名詞句の現れやすさに、使役動詞のあらわす意味が関係する可能性を論じる。ここでは、もっとも出現頻度が多かった使役動詞 *teettää* をとりあげる。使役動詞 *teettää*「作らせる, させる」は、その目的語として非常に多様な名詞をとる。そこで目的語名詞に注目し、目的語として示された名詞が行為にどう関わるかを調べると、目的語として現れた名詞群を幾つかのグループに分けることができる。以下のリストは、*teettää* の目的語として sk87 コーパスの用例に現れた名詞を、試みに 3 つのグループに分けてみたものである[8]。目的語として現れた名詞を単数主格形で示してある。

1. 「作らせる」: 目的語の指示対象は、行為の結果、新たに作り出されるもの:
   esite「パンフレット」; kaluste「家具」; kenkä「靴」; kirja「本」; laki「法律」; lamppu「ランプ」; ovi「戸」; postikortti「絵はがき」; postimerkki「切手」; puku「服」; rakennus「建物」; suomennos「フィンランド語訳」; teos「作品」; tuote「製品」; video「ビデオ」; väline「道具」
2. 「させる」: 目的語は、行為の過程でなされるものをあらわす:
   päätös「決定」; rekonstruktio「復元」; selvitys「調査」; tiedustelu「予備調査」; suunnitelma「計画」; tutkimus「研究」; työ「仕事」
3. 「もたらす」: 目的語の指示対象は、主語の存在によって、必然的にもたらされる:
   päivä「一日」; työ「仕事」; vallankumous「革命」

この分類をもとに、被使役者をあらわす接格名詞句を含む *teettää* の 5 つの用例をみると、接格名詞句が現れているのは、動詞が「させる」と解釈できる場合のみであることがわかる。(例文 (7) では動詞は *tutkimus*「研究」を主要部とする名詞句のみを用例から抜き出した。)

(7) *neljä-n* *suur-imma-n* *puoluee-n* **Suome-n** **gallupi-lla** *yhteisesti*
4-GEN 大きい-SUP-GEN 政党-GEN フィンランド-GEN 国勢調査委-ADE いっしょに
tee-ttä-mä, *vastavalmistunut* *tutkimus.*
する-CAUS-MAPT.NOM 出来上がったばかりの 研究.NOM
「4 大政党がフィンランド国勢調査委にさせた、できたての研究」(sk87-22:194)

(8) *työ=ryhmä,* *joka* **on** **tee-ttä-nyt** *käytännö-n* *työ-t*
ワーク=グループ REL.NOM be.3SG する-CAUS-PSPT.NOM 実際-GEN 仕事-AKK.PL
Etla-n **tutkijo-i-lla**.
E.-GEN 研究者-PL.ADE
「実際的な仕事は Etla の研究者にさせている研究チーム」(sk-35:569)

これに対し、「作らせる」の意では接格の被使役者が現れる用例はコーパスからは見つからない。以下は、接格被使役者のあらわれていない例:

[8] このうち、1., 2. と 3. の違いは *Nykysuomen sanakirja* と *Suomen kielen perussanakirja* の新旧 2 つのフィンランド語辞典でも区別されている。1. と 2. は、両辞典とも同じ項目で扱っている。

(9) *Tietenkin* *kustantaja* *sittemmin* **tee-tt-i** *uu-den*
もちろん 出版者.NOM その後 作る-CAUS-IMP.3SG 新しい-AKK
suomennokse-n.
フィンランド語訳-AKK
「もちろん出版者はその後新しい訳を作らせた」(sk-35:1677)

また、「もたらす」のような派生的な意味をもつと解釈される例の場合は、使役動詞としての性質が弱く、接格が現れることはない。

(10) *Euroopa-n* *talous=yhteisö-n* *kehitys=prosessi* **teettä-ä** *yhä*
ヨーロッパ-GEN 経済=共同体-GEN 発達=プロセス NOM もたらす-3SG さらに
enemmän *tö-i-tä* *suomalais-i-lle* *viranomais-i-lle* [...].
たくさん 仕事-PL-PAR フィンランドの-PL-ALL 当局-PL-ALL
「ヨーロッパの経済共同体の発達プロセスは、フィンランド政府の仕事を増やすばかりである (lit. さらに多くの仕事をもたらしている)」(sk87-15:238)

このように、行為によって、その結果何かを新しくつくる、という意味の行為を含む場合 (1.)、使役動詞 *teettää* は接格名詞を被使役者としてとりにくくなるようである。これに対し、*teettää* が行為の過程に主眼をおく場合 (2.)、被使役者は現れやすくなる傾向があるようである[9]。

すでに述べたように、使役動詞は、出現頻度に関し動詞毎にかなりのばらつきがあるうえ、動詞の出現頻度が比較的高くても、その動詞が被使役者をあらわす接格名詞句を伴ってあらわれるとは限らない。例えば、sk87 コーパスに現れている 17 の使役動詞 *rakennuttaa*「建てさせる」の用例のうち、被使役者をあらわす名詞句を伴う例は 1 例もない。また一方で、*maksattaa*「支払わせる」は、6 例中 3 例で被使役者項が共起している。このことは、もちろん、動詞によって被使役者項が現れやすいものとそうでないものがあることを示している。しかし、上で *teettää*「作らせる、させる」を例に述べたような被使役者をあらわす接格名詞句と動詞の意味との関係が、ほかの使役動詞の分析にも応用できるかどうかは今後確かめる必要がある。

4.2 使役構文の前の文脈が接格の被使役者項を要求する場合

接格被使役者が現れている構文の前の文脈を観察すると、文脈により被使役者をあらわす接格名詞句を省略できない場合があることがわかる。以下の例では、被使役者を含む節が直前の文と等位接続関係にある。

(11) *On* *sellais-i-a-kin* *työnantaj-i-a,* *jotka* *otta-vat* *luvattom-i-a*
be.3SG そのような-PL-PAR-& 雇い主-PL-PAR REL.NOM.PL とる-3PL 違法な-PL-PAR

maahan=muuttaj-i-a *palvelukse-e-nsa,* **tee-ttä-vät** **he-i-llä** / *∅ *tö-i-tä,*
入国者-PL-PAR$_i$ サービス-ILL-PX3 する-CAUS-3PL 彼-PL-ADE$_i$ / *∅ 仕事-PL-PAR
使役動詞 被使役者=接格

mutta *heittä-vät* *hei-dät* *ulos* *kun* *palkan=maksu-n* *aika* *tule-e.*
しかし 捨てる-3PL 彼-AKK.PL$_i$ 外に when 給料の=支払い-GEN 時.NOM 来る-3SG

[9]興味深いことに、それ自体明らかに使役動詞である *teettää* にさらに使役の派生辞をつけた動詞 (注 6 参照) *teetättää* は、sk87 コーパスから 3 例見つかったが、その意味は全て 1. (「作らせる」) であった。

「不法入国者を雇い、彼らに/*∅ 仕事をやらせておいて、給料の支払いの時になると放り出すような雇用主もいる」(sk87-26:1329)

この例では、被使役者をあらわす接格の人称代名詞は、直前の、等位接続された節の目的語「不法入国者」を指示している。この場合、同一指示関係を示すためには接格名詞句が必須であり、接格を省略すると文は非常に不自然になる。この例から、被使役者の指示する対象が、すでに前の文脈で言及されている場合は、被使役者項は必ず表層に現れなければならない。

さらに、この等位接続の例ほど直前の文脈とのむすびつきが強くない場合でも、接格名詞句を削除しにくい場合がある。

(12) *Ensimmäise-llä* *kerra-lla* *pysty-i-mme* *purista-ma-an* *kustannukse-t* *vain*
第1-ADE 回-ADE できる-IMP-1PL 押さえる-3INF-ILL 費用-AKK.PL$_i$ ただ

kymmenykse-en *siitä,* *mi-tä* *ne* *ol-isi-vat* *ol-leet,* *jos*
10分の1-ILL それ.ELA 何-PAR それら.NOM$_i$ be-KOND-3PL be-PSPT.PL もし

ol-isi-mme **tee-ttä-neet** *työ-n* **jo-lla-in** **kansainvälise-llä**
be-KOND.1PL する-CAUS-PSPT.PL 仕事-AKK 何か.ADE 国際的な-ADE
使役動詞 (条件法完了)
markkina=tutkimus=organisaatio-lla / $^{?}$∅.
市場=調査=組織-ADE / $^{?}$∅
被使役者=接格
「第一回目にして、我々は、国際的な市場調査組織に/$^{?}$∅ させた場合にかかるであろう値段の10分の1に費用を抑えることができた」(sk87-21:1197)

この例では、上で示した例文の直前に、話し手のプロジェクトがおこなった試みが紹介され、例文中の使役構文の被使役者項である「何らかの国際的な市場調査組織」はこのプロジェクトと対比されている。この場合も、例文の接格名詞句を省略すると、かなり不自然で舌足らずな文ができてしまう。従って、被使役者が前の文脈にある異なる行為者と対比される場合、被使役者は新しい情報として、表層に現れていなければならない。

同様に、以下の3例の *maksattaa*「支払わせる」では、実際に支払う人は、文脈から考えて、払うことを予想される人とは異なる人である。このような場合にも、接格名詞句は、実際に払うことになる人物を、明示的に示さなければならない。

(13) *Mutta* *epäreilu-a* *on* **maksa-tta-a** *lasku* **koko** **nuoriso-lla**.
しかし ずるい-PAR be.3SG 支払う-CAUS-1INF 代償.AKK 全 若者たち-ADE
使役動詞 被使役者=接格
「でも、若者全部にそのツケを払わせるのは、いけない」(sk87-29:197)

(14) *Mikä* *on* *se* *raha-a* *tursua-v-ien* *pankki-en*
何.NOM be.3SG それ.NOM お金-PAR まき散らす-PRPT-GEN.PL 銀行-GEN.PL

"kustannus=vastaavuus", *jo-ta* *ne* *aiko-vat*
「費用=相当」 REL-PAR それら.NOM つもりである-3PL

tili=asiakka-i-lla-an **maksa-tta-a** *?*
口座=顧客-PL-ADE-PX3 払う-CAUS-1INF
被使役者=接格 使役動詞
「金を垂れ流している銀行が、自分達の顧客に払わせようとしている「費用負担」とは、何なのか？」(sk87-49:1831)

(15) *Pieni* *ja* *varakas* *vähemmistö* *voi* *jatka-a* [...]
小さい.NOM and 裕福な.NOM 少数派.NOM できる.3SG 続ける-1INF

asu-mis-ta *ja* **maksa-tta-a** *korjaus=kulu-t* **mu-i-lla**.
住む-こと-PAR and 払う-CAUS-1INF 修理=費用.NOM.PL 他人-PL-ADE
使役動詞 被使役者=接格
「[ベネチアで歴史的に価値のある家に住んでいる] 裕福な少数の人たちは、住居に住み続けながら、家の修理費を他人に払わすことができる」(sk87-02:2163)

はじめの例では、悪さをしている若者たちではなく、若者全体に代償を払わせる点で、予測と異なる被使役者があらわれている。同様に 2 番目の例では銀行が、自分達の出した損を自分でなく客に払わせる、という点で、3 番目は自分の住む家の修理費を自分でなく他人に払わせる、という点で、それぞれ明示しなければわからない情報を被使役者がもっているわけである。

このように、使役構文が使われている直前の文脈は、しばしば、被使役者が表層に現れることを要求する。

これまで見てきた、文脈で被使役者をあらわす名詞句が省略不可能な例文を除くと、10 例の被使役者項を含む用例中、大きく文脈を損なうことなく被使役者項が削除可能と思われるのは 5 例だけである。うち、2 例はすでに (7) と (8) として挙げてある。以下に、残りの 3 例をしめす。

(16) *Myöhäise-mpi* **tarkist-utta-minen** *suurkaupungi-n* **asiantuntija-lla**
遅い-COMP.NOM 調べる-CAUS-MINEN.NOM 大都会-GEN 専門家-ADE
使役動詞 被使役者=接格
osoitt-i, *että* [...]
示す-IMP.3SG that

「のちに都会の専門家に調べさせたところ、分かったのは...」(sk87-41:1616)

(17) *Suome-n* *Suora-markkinointi-liitto* **tee-tt-i** *vuon-na* *1985*
フィンランド-GEN 直接=販売=組合 する-CAUS-IMP.3SG 年-ESS 1985
使役動詞
Gallupi-lla *tutkimukse-n* [“] *Postimyynti* *osto=tapa-na* [”].
国勢調査団体-ADE 調査-AKK 通信販売.NOM 購買=手段-ESS
被使役者=接格
「フィンランド直売組合は 1985 年、国勢調査団体に「購買手段としての通信販売」と称する調査を行わせた」(sk87-04:1354)

(18) *Yhdysvalta-in* *hallitukse-n* *pitä-isi* **tee-ttä-ä**
合衆国-GEN.PL 政府-GEN ねばならない-KOND.3SG する-CAUS-1INF
使役動詞
lainsäätäj-i-llä *selvä* *päätös* *siitä,* [...]
立法者-PL-ADE はっきりした.NOM 決定.NOM it.ELA
被使役者=接格

「合衆国政府は、... について、議会議員たちにはっきりとした結論を出させなければならないだろう」(sk87-31:630)

被使役者項が随意的に省略可能な例は、従って、他動詞派生の使役構文の用例中 5 例だけ、出現率にしてわずか 4.1% を占めるに過ぎない。

では、使役構文の後の文脈で、被使役者はどのくらい頻繁に言及されるのであろうか。人称代名詞の接格が現れている例 (11) を除くと、被使役者をあらわす 9 例の接格名詞句の指示対象は全て、被使役者として文脈上にはじめて現れる。ところが、接格名詞句の指示対象は、直後の文脈でふたたび言及されることは殆んどない。従って、他動詞派生の使役構文の被使役者は、それがたとえ表層に現れていたとしても、談話のなかでの重要度は極めて低いことになる。

5 まとめ

コーパスの用例データから、被使役者をあらわす接格名詞句は、使役構文の用例の中でほんの一部の例 (全用例中の 8.1%) でしか確認されないことが確かめられた。

さらに、被使役者をあらわす名詞句の出現環境を検証し、同一指示、被使役者の対比、さらには文脈から予測される被使役者と異なることを示す、といった、被使役者をあらわす接格名詞句を示さなければならない条件を指摘した。被使役者をあらわす接格名詞句があらわれている用例の幾つかは、このような文脈などの構文の外の条件によって説明することができる。このことは、フィンランド語の使役構文は被使役者を伴わない構造がより基本的であり、特に必要な場合にのみ被使役者をあらわす接格が挿入される、という解釈を補強する事実であると思われる。

また、使役動詞の意味により、被使役者をあらわす接格名詞句の出やすさに差があることも、不完全ながら示した。

参考文献

Comrie, Bernard 1975 “Causatives and universal grammar” *Transactions of the Philological Society* 1974: 1–32.

Hakulinen, Auli and Fred Karlsson 1979 *Nykysuomen lauseoppia* (現代フィンランド語の統語論). Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

Kytömäki, Leena 1978 “Kuratiivikausatiivi (依頼使役)” Alhoniemi, Alho (ed.) *Rakenteita: Juhlakirja Osmo Ikolan 60-vuotispäiväksi.* Turku: Turun yliopiston Suomalaisen ja yleisen kielitieteen laitos. 129-150.

— 1989 “Teettoverbit: johdon ja taivutuksen välimaastoa (間接使役動詞: 派生と屈折の中間地帯)” *Sananjalka* 31: 61–79.

Nedjalkov, V.P. & G.G. Sil′nickij 1973 “Typologie der kausativen Konstruktionen” *Folia Linguistica* VI: 273–290.

Nykysuomen sanakirja (現代フィンランド語辞典). 1951–61 Porvoo: Wener Söderström.

Palmer, F.R. 1994 *Grammatical Roles and Relations.* Cambridge: Cambridge Univeristy Press.

Pennanen, Esko V. 1986 “On the so-called curative verbs in Finnish” *Finnisch-ugrische Forschungen* 47: 163–182.

Suomen kielen perussanakirja (フィンランド語基本辞典). 1990–94 Helsinki: Kotimaisten Kielten Tutkimuskeskus.

Volodin, A. P., A. A. Xolodovič & V. S. Xrakovskij 1969 “Kauzativy, antikauzativy i kauzativnye konstrukcii v finskom jazyke” in Xolodovič, A. A. (ed.) *Tipologija kauzativnyx konstrukcij: Morfologičeskij kauzativ.* Leningrad: Nauka. 221–237.

Wunderlich, Dieter 1993 “Diathesen” in Jacobs, Joachim, Arnim von Stechow, Wolfgang Sternefeld & Theo Vennemann (eds.) *Syntax: Ein internationales Handbuch zeitgenössischer Forschung.* I. Berlin: Walter de Gruyter. 730–747.

補遺: 被使役者項の挿入による解釈のもう一つの証拠？

インフォーマントによれば、あまり頻繁に用いない使役動詞の場合、被使役者が接格で現れると不自然と感じられる場合があるらしい。次の例は、他動詞 *laka-ta*「(~に) ラッカーを塗る」から派生した使役動詞 *lakkau-tta-a*「(~に) ラッカーを塗らせる」を使い、被使役者をあらわす接格名詞句を加えた作例である:

(19) ?*Isä* **lakka-utt-i** *seinä-n* **naapuri-lla**.
父.NOM ラッカーを塗る-CAUS-IMP.3SG 壁-GEN 近所-ADE
「父は近所の人に壁を塗らせた (塗ってもらった)」

このような例の存在は、使役構文の基本構造として、被使役者がないものをたてる良い証拠となると思われる[10]

また、これに近い現象として、派生元の動詞自体が比較的複雑な項をとるとき、インフォーマントによっては接格形の被使役者を伴う使役構文は非常に分かりづらくなると感じるらしい。例えば、以下のsk87 コーパスから得た例文は、動詞 *tuoda*「もってくる」から派生された使役動詞 *tuottaa*「もってこさせる」を含んでいる。

(20) a. *Tä-nä* *vuon-na* *amerikkalaise-t* *olut=panimo-t* *ei-vät* *enää*
この-ESS 年-ESS アメリカの-NOMPL ビール=醸造所-NOM.PL VNEG-3PL もう
halua **tuo-tta-a** *maa-han* *saksalais-ta* *humala-a,* *koska* [...]
したい 持ち込む-CAUS-1INF 陸-ILL ドイツの-PAR 酵母-PAR なぜなら
「今年、アメリカのビール製造元は、ドイツの酵母を輸入したいとはもう思っていない」 (sk87-01:315)

tuottaa は、持ち込み先を方向格で、持ち込むものを目的語にとる。上の例では、目的語である酵母の持ち込み先は入格であらわされている (*maa-han* 陸-ILL「陸へ」, cf. *tuo-da maa-han* =「輸入する」)。この文に被使役者をあらわす接格名詞句を加えて以下のような文を作ると、インフォーマントには文があまりにも複雑すぎ、すぐには理解できないと感じられるという。

(20) b. ?*Nyt* *amerikkalaise-t* *olut=panimo-t* *ei-vät* *enää* *halua*
今 アメリカの-NOMPL ビール=醸造所-NOM.PL VNEG-3PL もう したい
tuo-tta-a *maa-han* *saksalais-ta* *humala-a* **saksalais-i-lla**.
持ち込む-CAUS-1INF 国-ILL ドイツの-PAR 酵母-PAR ドイツ人-PL-ADE
「今や、アメリカのビール製造元は、ドイツ人に (ドイツ人をつかって) ドイツの酵母を輸入させたいとはもはや思っていない」

[10]ただし、このような例の文法性の判断は、人によって大きく異なり、実際には、接格の被使役者を含む使役構文を常に不自然と感じる人から、接格被使役者の使用にまったく抵抗を感じない人まで、さまざまらしい。Kytömäki (1989:73–74) は、方言による違いの可能性を指摘しているが、詳細は不明である。